

成果と課題

1 研究の成果

(1) 学級経営について

普段の授業は学級経営であることを、レポート報告会等で共通理解できたと思っています。研究のテーマを意識した経営案をもとに、毎日の小さな積み重ねや工夫が授業につながっていることがお互いにわかり合えたのではないのでしょうか。

(2) 単元構想について

これはご自身の課題として「単元構想」とあげている方もたくさんいましたが、それは今よりもよい構想が立てられるはずであるとの思いから出たことのように感じました。単元構想を作ることを通して、子どもの思考を予想し切実になりうる問題を想定するということができたかと思います。1時間の授業だけでなく、現在の子どもの思考はどうなっているのか、そしてそれは全体の中でどのような位置づけとなるのかを、その都度考えられたことは、大きな成果と言えるのではないのでしょうか。ただし、昨年度の反省でも見解として出しましたが、教師の独りよがりやご都合主義になっていないかどうか、構想を一旦練った後または単元の途中で、深く考える必要があることには変わりません。→ **n次案づくりの必要性は課題**

2 研究の課題

(1) 「切実な問題」について（昨年も課題となっていました）

今年度、切実な問題の条件について、小林先生のお話をもとに提案しました。みなさんが「切実さ」を意識して単元構想を練っていたことはよく伝わってきましたが、この3つの条件について今以上にしっかり頭に入れたうえで、何が子どもにとって「切実」となり得るかを吟味する必要があります。単元構想をたてる際、ご自身の想定した「切実な問題」は3つの条件に合致していたでしょうか。目の前の子どもをみとり、単元の途中でも再考してきたでしょうか。手だては十分に講じてきたでしょうか。または、敢えて教師が出ずに見守ることはできたでしょうか。次の(2)にもつながりますが、そのあたりが課題として残るのではないかと考えています。

(2) 「みとり」と「教師の出どころ」について

(1)の「切実な問題」についてと「みとり」については、切り離せないものであることはすでに共通理解できていることです。「みとる方法」は様々です。見とったことが生きる支援や指導の方法も様々です。これをすれば大丈夫というものはないと思いますが、今年度はみなさんが「みとり」を強く意識して授業をつくってきたことがよく伝わってきました。ただ単に、「子どもが言ったから」ということで、安直に「切実な問題」としてとらえることもなくなったように思います。

同時に、教師の「出過ぎ」「出なさ過ぎ」「出どころに迷い」などを課題として挙げている、または感じている方もいました。これは毎日の生活の中で、自分自身で意識していくしかないと思っています。「Aの場合は○を言おう、しよう。」「Bの場合△△を言おう、しよう。」などの手立てを、たくさん考える習慣が大切ではないのでしょうか。そして、日々が反省と改善の繰り返しとなるよう教師の「出どころ」を考え、意図的に出たり出なかったりする必要があるでしょう。「教師の希望的観測」のもとに行うのではなく、「最悪の事態を想定し手だてをいくつも用意しておく」ということです。そうすると、終わってから悔いが残らず、次へのステップとすることができないのではないのでしょうか。

みとったことを、どのように生かすのか、どうすればその子（その子たち）が生きるのか、教師の希望的観測のもと都合よく子どもを「生かしてしまっ」ていないかどうかを考える必要があるかと思います。